2024年四旬節教皇 メッセージ

「告びる分しえいし寄ことが、、のので状へをういるがとは抜をく、にいるがというもののがはないのでが、あるがいるがあるがあるがが、できれてであるがあるがあるがあるがあるがあるがあるがあるができればでしたができない。 自出わさたきの。

2024年四旬節教皇メッセージ[1]

荒れ野を通り、神はわたしたちを解 放へと導かれる

親愛なる兄弟姉妹の皆さん

わたしたちの神はご自分を啓示なさ ると、解放を告げます。「わたしは 主、あなたの神、あなたをエジプト の国、奴隷の家から導き出した神で ある」(出エジプト20・2)。シナ イ山でモーセに授けられた十戒は、 このように始まります。民は、神の いう導き出すこと(エクソドス)が 何を指すのか、よく分かっていま す。奴隷の経験はなおも、彼らの肉 に染みついているのです。彼らは荒 れ野で、解放への道となる、契約の 十のことばを受け取ります。わたし たちはそれを「おきて」と呼んでい ます。神はご自分の民を愛をもって

教えられましたが、その愛の強さを 強調するためにです。解放への呼び かけは、事実力強いものです。それ は一度でくみ尽くされるものではあ りません。途上で熟すものだからで す。荒れ野にいたイスラエルの民が エジプトへの心残りを抱いていたよ うに――実際、彼らは幾度も過去を 懐かしみ、天とモーセに対して不平 をぶつけます――、今日の神の民も また、捨て去る決意をしなければな らない、自分を苦しめるしがらみを 内に抱えています。わたしたちがそ れに気づくのは、希望を失い、荒れ 果てた地にいるように人生をさまよ い、ともに向かっているはずの約束 の地が見えないときです。四旬節 は、預言者ホセアが告げたように、 荒れ野が再び、最初の愛の舞台へと 戻る、恵みの時です(ホセア2・ 16-17参照)。神はご自分の民が奴 隷状態から抜け出し、死から生へ渡 る道を味わえるよう、教え導いてく ださいます。花婿のように、わたし

たちをご自分のもとに抱き寄せ、わたしたちの心に愛のことばをささやかれます。

奴隷状態から解放への脱出は、抽象 的な道のりではありません。わたし たちの四旬節も具体性をもたせるに は、まずは事実を見ることが必要で す。主なるかたは、モーセを燃える 柴のもとに呼び寄せて話しかけると すぐに、ご自分が神であること、見 ておられる神、そして何より聞いて おられる神であることを明かされま した。「わたしは、エジプトにいる わたしの民の苦しみをつぶさに見、 追い使う者のゆえに叫ぶ彼らの叫び 声を聞き、その痛みを知った。それ ゆえ、わたしは降(くだ)って行 き、エジプト人の手から彼らを救い 出し、この国から、広々としたすば らしい土地、乳と蜜の流れる土 地……へ彼らを導き上る」(出エジ プト3・7-8)。今日も、虐げられ た多くの兄弟姉妹の叫びが天に届い

ています。心に問うてみましょう。 その声は自分にも届いているだろう か。それに心動かされているだろう か。揺さぶられているだろうか。多 くの要因によってわたしたちの間に は隔たりが生まれ、初めの時よりわ たしたちを結んでいる兄弟愛を否定 するのです。

ランペドゥーザ島の訪問時に、無関 心のグローバル化について二つの問 いを投げかけました。どちらも実に 今を映し出しているものです。「ど こにいるのか | (創世記3・9)、そ して「お前の弟アベルは、どこにい るのか | (創世記4・9) --。四旬 節の歩みを具体的なものとするに は、もう一度これらの問いに耳を傾 け、わたしたちは今なおファラオに 支配されたままであると告白できな ければなりません。わたしたちを疲 弊させ、無感覚にする支配です。わ たしたちを分断し、未来を奪う成長 モデルです。土地を汚し、大気を、

水を汚染し、そればかりか魂までを も汚すものです。わたしたちの解放 は洗礼ですでに始まっているとして も、わたしたちの中には、奴隷状態 への言い知れぬ郷愁が残っているか らです。自由を犠牲にしてまでも、 なじんでいるものの安心感に惹かれ るのと同じです。

出エジプト物語の、とても重要な細 部を取り上げたいと思います。神 が、見ておられ、心動かされ、解放 してくださるのであって、イスラエ ルの求めによるのではないというこ とです。まさしくファラオは、夢を 砕き、天空を奪い、尊厳が踏みにじ られ真のきずななどない世界が変わ らず続くのだと思わせるのです。つ まりファラオは、すべてが自分に従 属するようにしておくのです。自分 の胸に問うてください。新しい世界 を望んでいるだろうか。同胞に対す る責務を放棄しようとはしていない だろうか――。わが兄弟である多く

の司教、そして平和と正義のために 働く大勢の人の証言から、訴えるべ きは希望の欠如である、その確信を いっそう強めました。それは夢見る ことの妨げであり、天に届き神の心 を打つ、声なき者の叫びです。荒れ 野でイスラエルの民を惑わせ、前進 を阻む、奴隷状態への郷愁に似たも のです。脱出は、中断されうるので す。そうでなければ、世界規模での 兄弟愛の実現を目前にしながら、科 学、技術、文化、法制度が、万人の 尊厳を保証しうる水準にまで発展し ながら、格差と紛争の闇を進んでい ることの説明ができません。

神はわたしたちにうんざりなさることはありません。四旬節を、主のみことばが、今一度わたしたちに注がれる集中期間として大切にしましょう。「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である」(出エジプト20・2)。回心の時であり、解放の

時です。毎年、四旬節第1主日に思 い起こすとおり、イエス自身、霊に 導かれて荒れ野に入り、ご自分の自 由意志をもって試みを受けられまし た。40日の間、そのかたはわたした ちの先に、わたしたちとともにいて くださいます。そのかたは、人とな られた御子です。ファラオとは異な り、神は臣民ではなく、子らを望ん でおられます。荒れ野は、わたした ちの解放を、再び奴隷状態へと陥ら ないという個人の決意へと熟させる ための場所です。四旬節の間に、わ たしたちは新たな判断基準と、かつ て足を踏み入れたことのない道へと ともに繰り出す共同体とを見いだす のです。

出エジプト記やイエスの荒れ野の誘惑がはっきりと伝えているように、そこには闘いがあります。「あなたはわたしの愛する子」(マルコ1・11)、「あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない」

(出エジプト20・3) という神の声 は、まさに敵の偽りに反駁されてい ます。ファラオよりも恐ろしいのは 偶像です。偶像は、わたしたちの内 に聞こえる敵の声だといえます。何 でもできるようになりたい、だれか らも認められたい、皆の上に立ちた いーー。人はだれしも心の中に、こ の偽りの誘惑を感じるものです。そ れは踏み固められた道です。だから わたしたちは、お金に、何かしらの 計画、考え、目標に、自分の地位 に、慣習に、さらには特定の人に、 執着してしまうことがあるのです。 これらのものは、わたしたちを前方 へと押し出すのではなく、動けなく させるでしょう。わたしたちを一つ に結ぶのではなく、対立させるで しょう。それでも、偽りの魅力に屈 することのない新しい人類が、小さ く、身を低くした人類が存在してい ます。一方で、偶像はそれに仕える 者たちを、口のきけない、目の見え ない、耳の聞こえない、動けない者 にしていますが(詩編115・8参 照)、心の貧しい人たちは、世をい やし、支える、善の静かな力へと、 開かれ、整えられています。

今こそ行動する時です。ですが四旬 節の間の行動は、じっととどまるこ とも含みます。神のことばを受け止 めるためにじっくりと祈り、あのサ マリア人のように、傷ついた兄弟姉 妹にじっくり向き合うことです。神 への愛と隣人への愛は、結ばれた一 つの愛です。他に神々をもたないと いうことは、わたしたちの隣人の肉 体をとる神の現存に、じっくり向き 合うということです。ですから祈 り、施し、断食は、独立した三つの 行為ではなく、開く、つまり明け渡 すという、ただ一つの行為なので す。重くのしかかる偶像を手放し、 自分をがんじがらめにする執着を捨 て去ることです。そうなれば、萎縮 し、断絶した心は目を覚ますでしょ う。ですからテンポを落として、

びかけます。ライフスタイルについ てじっくり考える機会を信者に用意 すること、あるいは、地域内での共 同体の存在や、その地域をよりよく するよう行っている共同体の貢献に ついて、確認する時間を取ることで す。キリスト者の悔い改めが、イエ スを悲しませるものであるなら大変 です。イエスはこうも教えておられ ます。「断食するときには、あなた がたは偽善者のように沈んだ顔つき をしてはならない」(マタイ6・ 16)。むしろ喜びに満ちた表情で、 解放の香りを放ち、すべてのもの ――もっとも小さく、いちばん近い ところから始めて――を新たにする 愛を解き放ちましょう。どのキリス ト教共同体も、そうなれるはずで す。

この四旬節が回心の時となるならば、途方に暮れる人類は、創造力の揺さぶり、つまり新たな希望の閃光を感じることでしょう。昨年の夏に

リスボンで会った若者たちに伝えた と同じことを、皆さんにも伝えま す。「探し求め、思い切ってやって みる、探し求め、思い切ってやって みることです。この歴史的局面で、 課題はうず高く、うめき声は悲惨で す。わたしたちは散発的な第三次世 界大戦のただ中にいます。ですが、 断末魔の苦しみにあるのではなく、 産みの苦しみの中にいるのだと考え る覚悟でいましょう。壮大な舞台の 幕切れではなく、幕開きに立ってい るのだと。そう考えるには勇気が必 要です」(「WYDリスボン大会中の 大学牛への講話(2023年8月3 日) |)。それこそが回心の勇気で あり、奴隷状態から抜け出る勇気で す。信仰と愛は、この小さな希望の 手を取って進みます。信仰と愛が希 望に歩みを教え、希望が信仰と愛を 引っぱっていくのです^[2]。

皆さんと、皆さんの四旬節の歩みに 祝福を送ります。 $\Box - \overline{\neg}$

サン・ジョヴァンニ・イン・ラテラ ノ大聖堂にて

2023年12月3日

待降節第1主日

フランシスコ

[1] カトリック中央協議会訳 (https://www.cbcj.catholic.jp/ 2024/02/07/29082)

[2] シャルル・ペギー「第二徳の秘義の大門」、猿渡重達訳、『希望の讃歌――第二徳の秘義の大門――』中央出版社、1978年、61頁参照。

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/shijyun-setsu-kyoukou-messeji2024/(2025/12/16)